

子どもとのり

原口純子

ぬるぬる べたべた による ねばねば、のりはねばり、のりは手をよごし、のりは紙をくっつける。このごく日常的な材料にも、よく見るとさまざまな側面と、問題点が観察される。

のりと子どもについて考える場合、大きく分けて二つの面が考えられると思う。一つは紙などをくっつける接着の手段としてののりであり、もう一つは、のり自体を活動の目的とする場合である。

○接着の手段としてののり

保育の活動の中でも、時代とともにさまざまな教材や教具がはやったり廃^やったりするが、のりは今やひどく斜陽化した教材の一つと言えよう。たとえば、テーブルの上ののりと、セロファンテープとが出ていると大半の子どもはセロファンテープの方に手をのばす。輪つなぎや、画用紙の上に切り紙・布・毛糸などを貼りつけるような遊びですら、放っておけ

ば子どもたちは上からセロファンテープやホッチキスでおさえつけ、のりを使おうとはしない。セロファンテープや、ホッチキスが好まれるのは手もよごれず簡便ですぐにくっつくことと共に、何より表面から接着できるため、子どもにとつて使い易いからであるように思う。そしてこれらの用具の出現ほど保育の活動（とりわけ製作活動）における画期的な進歩をもたらし、活動の可能性を広げたものはないと思う。平面を立体にするのでも、立体と立体とをくっつけるためにも、セロファンテープは子どもの持つイメージを自分自身の手で具体化することを容易にしたのである。

これに比べると、のりは手にねばりつくこと、接着したいものの裏側につけなければならぬこと、のりはつけすぎるとよくくっつかないこと、乾くまでしばらくじっと待たなければならぬことなどの点で劣っている。このことを考え合わせると、一見した限りでは、のりはあまり子どもに適したものとは言えないように思われるかもしれない。

しかし、子どもの仕事であれ、大人の仕事であれ、簡便さにかまかせて何でもテープや針で上からくっつけてやるテカテカ、ガサガサした仕事は好ましいものではない、便利であっても、作り出されたものが美しいとは言えないからである。

のりの仕事は手はかかっても美しさを出すことができる。たとえばぬれると伸び、乾くと縮む紙の性質と、水分の多いのりとがびったり合わさって貼り上った襖や障子の美しさをおもいおこしてみるとよい。そこには、手軽な仕事には見られない粋が感じられる。

先日子どもと一緒にベープサート作りをしている時、ふと思いついて、セロファンテープやホッチキスでとめるのをやめ、化学接着剤(ボンドなど)とのりとでくっつけたことがあった。しばらく乾かしてみたところ、いつになくしぶうちわのようにしっかりしたベープサートができあがった。かなり雑に扱ってもこわれることもない。のりの良さを再発見した思いがした。

私がかねてより、事務用ののりでなくて、もう少しよくくっつく子どもに適したのりはないものかと思っていたが、前述のボンドのようなものが適当であることを発見した。そういえば、先年、アメリカのあるナースリースクールに子どもを通わせていた時、そこではよくカラー画用紙の上に貝がらやマカロニ、ボタン、毛糸、布切れなどをのりではりつける遊びをしていた。こののりは、化学接着剤(ボンドのようなもの)で比較的早く乾き強力な接着力を持っていた。このよ

うな私の経験から判断すると、この種の材料をもっと取り入れて活用することを検討することが望ましいように思う。

○のりあそび——フィンガーペインティングなど——

近ごろ私の興味を引きつけるものの一つに「手ざわり、肌ざわり」の問題がある。接着というところに着目すると、のりはあまり子どもに好まれないと言えよう。しかしあのぬるぬる、ねばねばした感触を大々的に利用してのりを活動に取り入れると様相が一変してしまう。これは、フィンガーペイントやプレイドウの活動そのものであり、子どもに人気のある活動である。

乳幼児期は触覚の時代であり、触って確かめるということとは、物の本質を知る上で大変大切なことである。生きた子猫を抱いた感じや、流れる水に手をさらした感じなどと同様、フィンガーペイントの感触やプレイドウの肌ざわりは、理屈を越えて、知識や人格のベースを養うもののように思われる。のりのねばねばした感触、ぬるぬるした感触等を遊びに利用することの意義は大きく、のりを今一度角度を変えて見なおしてはいいかがなものであろうか。

(桜村立竹園東幼稚園)